

『走れメロス』を読んで

二年三組

●●●●

わたしには親友という言葉で呼ぶにふさわしい友人がいました。家が離れているために、学校は別々でしたが、ずっと仲良しでした。彼からしばらく連絡が途絶えました。部活で忙しいのかな？ それとも家の手伝いで忙しいのかな？ と思い、こちらから連絡はしませんでした。夏休みも中盤にさしかかったある日、「一緒に宿題をやらう」と思い、彼の家に電話をしました。しかし、受話器から聞こえたのは「お客様のかけになった電話番号は：：」というものでした。そのことを母に告げました。すると、「●●君は、六月にお父さんの仕事の関係で引っ越すことになったのよ」と、母は答えました。その歯切れの悪い返事に、いやな予感がしました。

でも、おかしな話です。●●君の家は自営業、●●経営です。転勤があるサラリーマン家庭ではありません。

「どうして引っ越しをしたの？」

と母に聞きました。母の口から出た言葉は意外なものでした。

「●●君のお父さんは、借金の連帯保証人になったのよ。お金を借りた人が逃げて、連帯保証人になった。●●君のお父さんに借金の返済義務が生じたの。その借金を返済するため、家と土地を取り上げられて、その上、預貯金、家財道具も差し押さえられたの。しばらくの間、●●君のおじいちゃんのところでは生活するらしいの。これ以上は分からないわ。でも、はんこ一つで全財産がなくなるなんて怖い世の中ね」

そう母は言い、これ以上は話したくはなかつたのでしよう、あわただしく夕食の準備を始めました。

わたしは自分の部屋に戻り、ベッドに横た

わりました。枕元には『走れメロス』があり
 ました。宿題の読書感想文を書くために何日
 か前に読んだ本でした。この『走れメロス』
 は、友情とはなんとすばらしいものだろう、
 人を信じることはいかに尊いものだろう、力
 強い気持ちにさせてくれた一冊でした。
 しかし、●●君のお父さんの話を聞いた後
 では、「この小説っていったい……と、数
 日前に『走れメロス』に感動した自分が、な
 んだかむなく思えてしまいました。
 ぼーっと天井を見上げていると、●●君の
 お父さんの顔が浮かびました。そして、いま
 での思い出が、頭の中を駆けめぐりました。
 ●●君のお父さんはとてもいい人でした。
 地元商店街の野球チームでピッチャーをして
 いることもあり、カーブやシュートの投げ方
 を教えてもらったことがありました。
 子どもものころからプラモデルが趣味だった
 ということで、接着剤でくっつけただけの僕
 のプラモデルに何回も何回も色を重ねて塗っ

てくれたこともありました。色を塗られたプラモデルはまるで本物のようになりました。そのプラモデルは今でもわたしの宝物です。 どうしてあんなに優しかった ● ●君のお父さんが、土地と家を取り上げられなければならぬのでしょうか？ そして、逃げるようにして、遠くの町に引っ越さなければならぬのでしょうか？

夕食後、このやるせない気持ちを父に話しました。

「 ● ●君のお父さんは自営業だったから、付き合ひ上、保証人になるのを断ることができなかったのかもしれないね。オレのようなサラリーマンには分からない事情があるのだろ う。でも、相手の人も、最初から借金を踏み倒すつもりはなかったと思うよ。 ● ●君のお父さんも、この人ならばきつと返済してくれ ると思っただから、連帯保証人になったんだと 思う。しかし、これは現実なんだ。現実 は現 実として受け止めないといけない、そんな年

齡におまえもなったんだね」
 そう答えてくれました。
 「でも、『走れメロス』では、……」
 と言うと、
 「小説は小説なんだ。もしかしたら、『走れ
 メロス』は、友情のすばらしさとか、人を信
 じる尊さとかの話ではないのかもしれないね
 友情はこうあるべきだ、こうあつてほしい、
 人を信じれば報われるんだ、報われなければ
 だめなんだという願望が、小説という形にな
 ったのかもしれない。中学生のときに読んだ
 きりだから、きちんとした答えになっている
 かどうか分からないけどね……」
 それが父の答えでした。
 父の言うことが正しいのかどうか、わ
 たしには分かりません。人を信じるとはどう
 いうことなのか、自分でも一生懸命考えてみ
 ました。でも、答えは見つかりませんでした。
 しかし「小説は小説なんだ」の、父の言葉
 がずっと耳に残っています。